

木魚について

52期生

I テーマ設定の理由

昨年総合の授業で、わが班は天王寺区下寺町について調べた。その下寺町の大覚寺という寺院で、僕は不思議な木魚を見つけた。それがすべての始まりだった。

II 研究方法

- (1) 文献調査…①府立中央図書館などで、仏具辞典や仏教関係の本を調べる。
②インターネットで木魚について調べる。
- (2) アンケート調査…寺院(各宗派の総本山や大本山など)や仏具店、仏具製作者にアンケートを出し、回答を頂く。
- (3) 実地調査…①仏具店や寺院に行き、木魚を見せて頂く。
②木魚職人の方に製作現場を見せて頂き、お話を聞く。

III 研究内容

1. 木魚についての基礎知識

(1) 木魚の定義

木魚を見たことがあっても、そもそも木魚とはどのような物なのかを知らない人は多いはずだ。そこでこの章では、まず“木魚とは何か”から述べていく。

木魚は「読経や唱名(念仏を唱えること)の時に打ち鳴らす楽器。木製で外面に魚鱗が彫ってある。布や革で包んだ棒(倍〔ばい〕と言う)で打ち鳴らす(『現代の仏壇・仏具工芸』より)物である。また、木魚鼓とも呼ばれる。なぜ魚の形をしているのか。その由来は「魚は常時目を開いているので、木を魚の形に削り、これを打つことによって自らの怠惰、惰眠を戒めたのである(同上)。」でもその音は眠気を誘うような音色なのだが…。

(2) 木魚の歴史

木魚の原型の魚鼓は、平安時代の『參天台五台山記』にその記述があり、『仏具辞典』によるとその他数々の伝説があるという。また『勅修百丈清規』(『禅林象器箋』唱器門『木魚』の項に記載)には「齋粥の二時には長撃二通し、僧衆を普請するには長撃一通し、行者を普請するには二通すべし」とある。人と話すことを固く禁じている禅寺などで人を集める時に使われたということだ。〔写真⑤〕

その後、明代に頭と尾が相接し、更に二頭一身(現在の形)になったという。その木魚を日本に持って来たのが、かの有名な隠元禅師だった。それが承応3年(1654)のことである。浄土宗ではその約100年後の宝暦年間(1751～1764)に鳥羽のある和尚が初めて使ったとされている。最初は保守派の僧が使用に反対し、一時期は使用禁止になったが次第に認められるようになり、現在では浄土宗の重要な仏具のひとつ

つとなっている。

(3) 木魚を使う宗派 ～木魚は坊さんの必需品?～

「“お坊さん”から連想することは?」と聞くと、たぶんほとんどの人が木魚を叩きながら読経をしている姿を連想すると思う。しかし、すべての宗派のお坊さんが木魚を使っていると思うのは間違いである。木魚を使う宗派は、浄土宗(浄土宗系)、臨済宗・曹洞宗・黄檗宗(禅宗系)、天台宗(天台宗系)だけで、(末寺では使われている所もあるらしいが)他の宗派では使われていない。

(4) 木魚の装飾

だいたい以下の数種類ぐらいに分類される。(装飾とは外の彫りのことである。)

① 魚2匹彫り

最も標準的な彫り方。2匹の魚が顔をつきあわせた格好をしている。市販されている物の大部分がこの形である。

(写真①)

② 魚1匹彫り

①よりは多少珍しい彫り方。1匹の魚の頭と尾をくっつけた形である。(写真②)

③ 龍彫り(別名:極上彫り)

高価な木魚にだけ見られる彫り方。寺院向けの木魚の彫りなので、一般に売られている木魚でこの彫りの物は少ない。(写真③)

④ 廉価版

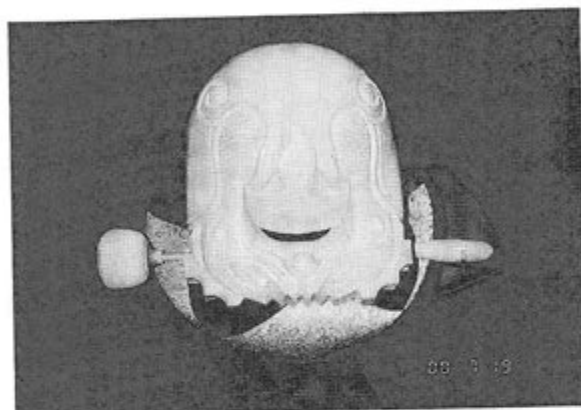
機能重視(?)の木魚。なんの装飾も施されていない。一般には売られておらず、問屋などを通じて寺院に売られているため珍しいと言えは珍しい。(写真④)

⑤ その他

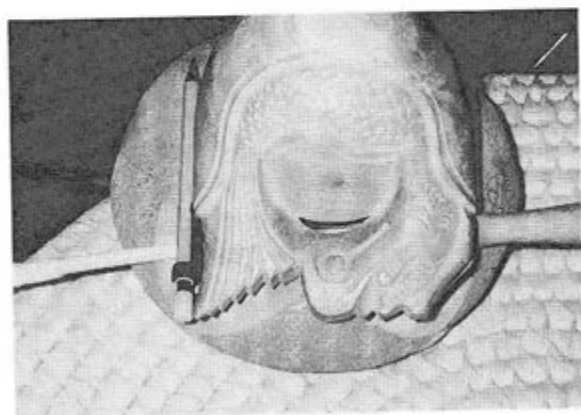
「シャチ彫り」などの特殊な彫り方も存在するらしい。

⑥ 番外編:魚鼓

木魚の歴史の部分で触れた物。魚そっくりの形をしている。沈黙が礼儀となっている禅宗寺院で、人を集める時に打つ。音がとても大きく、寺院の隅々まで響き渡る。濫りに叩くと“集合”と勘違いしたお坊さんがぞろぞろとやって来る結果になるので、寺で見つけても絶対に叩かないように。(写真⑤)



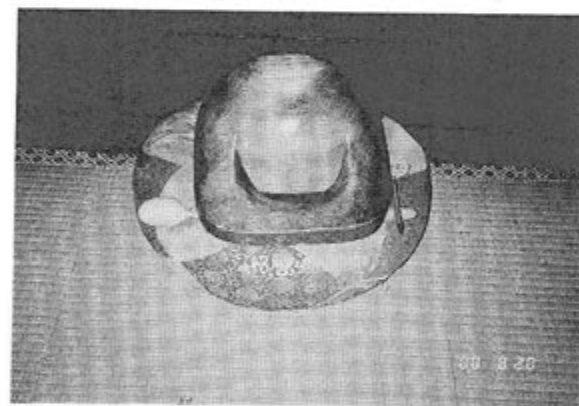
▲写真① 魚2匹彫り(銭長堂)



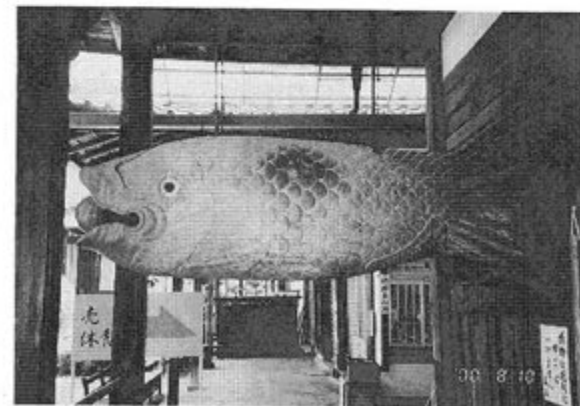
▲写真② 魚1匹彫り(萬福寺)



▲写真③ 龍彫り(春陽軒)



▲写真④ 廉価版(知恩院)



▲写真⑤ 魚鼓(萬福寺)

品質は国産の物に比べると格段に劣るようだ。

(5) 木魚の材質

木魚の原材料は木である。当たり前だが他の材質のものはない。(楽器としての木魚については不明)木の種類も少なく、下の数種類程度である

- 桑(くわ)…木魚の材料の中では最高級品。しかし木が小さいので大型木魚の製作はできない。
- 本楠(ほんくす)…純日本産の楠。大きな物から小さな物まであらゆる木魚を作ることができる。独特の香りがする。
- 楠(くす)…外国産のクスノキ。香りは非常に薄い。
- 榎・桐(なぎ・きり)…この木を使っている木魚は少ないらしく、僕は見ていない。

(6) 木魚の価格

木魚の値段は大きさに比例し、また木の種類によっても変わってくる。一番安い物だと、楠の三寸(約9cm)で4000~5000円ぐらいから、高い物はそれこそ無限大である。大きい木があればいくらでも大きい物を作ることができるので、値段もそれに合せて上がる。僕の調査によると、2尺(約60cm)の本楠の物で数百万~1000万ぐらいである。

(7) 木魚の製造地域

昔は木魚を国内で(主に名古屋や京都)で生産していた。しかし近年、職人数の減少や職人の高齢化とそれに伴う賃金の上昇により、国内ではほとんど作られていない。それに変わって今では外国(台湾など)の木魚が主流となっている。ただし、

(8) 木魚の音

木魚によって音は異なる。音の良し悪しがあり、同じ人が同時期に同じ木で彫った物でも音は異なるのである。音は内部の割り抜き方によって異なり、木魚にヒビが入ったり、割れたりすると鳴らなくなる。一概にどうとは言えないが、小→大、楠→本楠→桑の順に音が良くなる傾向があるようだ。僕は音も検証してみようと思ひ、ビデオカメラでいくつかの木魚の音を収録してみたが、再生された音質があまりにも悪かったため断念した。やはり木魚はナマがよい。

(9) 木魚の付属品と使用上の注意

木魚を叩くために必要な2つの道具を紹介しておこう。

・倍…木魚を叩く棒。先端に布などが巻きつけてある。ハードタイプ(一本の棒)とソフトタイプ(籐製でしなり、ショックが少ない)の2種がある。

・ざぶとん…木魚を叩く時に傷まないように下に敷く。

また、木魚の使用上の注意だが、落とさないようにする以外は特になし。木に優しい環境にしておくぐらいである。

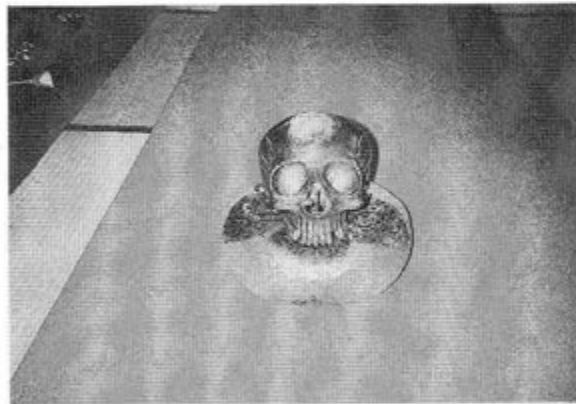
2. 近畿十五ヶ所木魚遍路

この遍路で、僕は11ヶ所の寺院と4ヶ所の仏具店を廻った。その中で特に目だった物について以下に述べていく。

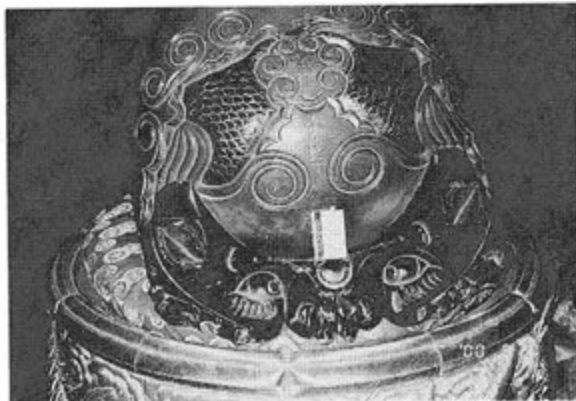
(1) ガイコツ木魚 - 大覚寺(天王寺区・下寺町)〈浄土宗〉 -

総合の授業の時に僕が発見した木魚というのがこれだ。ガイコツそのものと見紛うほどの精巧さである。この木魚は全国でここだけにしかない、非常に貴重な一品である。この裏(頭骨から延髄が出ている部分に穴がなく、平になっている)に「可笑翁好 原田清助作」(かしょうおこのむ はらだせいすけさく)という文字が彫ってある。

僕は最初「この可笑という人はかなりの風流人か有名人ではないか」と考えた。また、「もしそうなら著書のひとつぐらいあるだろう」と思ひ、図書館で『古書総目録』を使って『可笑』について調べたところ、3人の『可笑』の名が挙がった。その内2人は時代が違ったので、一応『名符玉づくし』という役者の評判



▲写真⑥ ガイコツ木魚(大覚寺)



▲写真⑦ 木魚(知恩院)

記を書いていた人ではないか、というところで調査は行き詰まった。だがこれがここに彫られた人物という確証はなく、また原田清助に至っては一切が謎のままである。果たしてこの木魚の謎が解明される時は来るのだろうか…?

〔大きさ〕約5寸(約15cm)〔彫り〕ガイコツ彫り〔材質〕不明〔製造年〕不明(江戸時代?) (写真⑥)

(2) 最大の木魚 - 知恩院(京都市)〈浄土宗〉 -

知恩院の御影堂(本堂)に置かれていた。この他にも同じような規模の木魚が3個あった。この4個の木魚は普段は使われていないのだが、12月25日に行われる『お身拭い式』の時には使われるそうだ。このような大きい木魚には専任の叩き役のお坊さんがいる。かなり重い倍(僕も他の寺院で叩いてみたが重かった)を使うので、若いお坊さんが任される。この他にもこの寺には木魚が数百個もあるらしい。

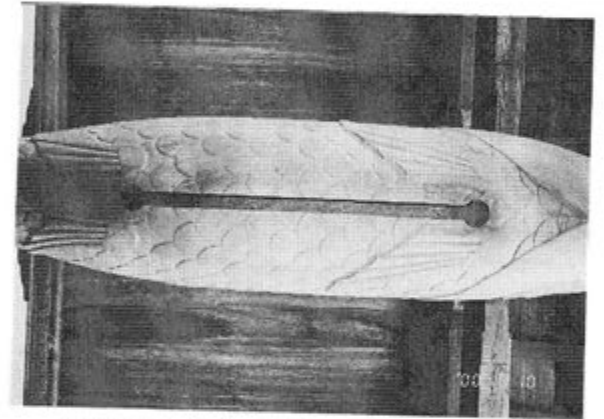
〔大きさ〕約2尺3寸(約70cm)〔彫り〕龍彫り〔材質〕(朱塗りのため)不明〔製造年〕不明

(3) 魚鼓 - 萬福寺(京都府・宇治市)〈黄檗宗〉 -

変色している部分(3ページ写真⑤)が長年叩かれている部分である。下から見るとシンプルな造りなのだが、これだけで全山に響き渡る音を出せるのだから驚きである。先程述べたように、写真⑤の右端下に「鳴物は絶対に叩いてはいけません 本山」と書いてある。

〔大きさ〕長さ2m40cm

幅50cm 高さ(推定)80cm〔材質〕不明〔製造年〕S.47以前(写真⑤・⑧)



▲写真⑧ 魚鼓-下部(萬福寺)

3. 幻の木魚職人を探せ!!

僕はこの研究を始めた時、「木魚職人の方の所は8月の中旬ぐらいに訪問できる」と予想していた。しかしその予想はあまりにも楽観的すぎた。取材を始めてから仏具店、寺院、仏壇共同組合などをあつたが、まったく手掛かりがなかったり、知っているも「取り引きができなくなる」と断られたりした。そんな時、姫路に住んでいる祖母から「百貨店でやっていた物産展で木魚を見た」との情報がいった。早速百貨店に問い合わせたところ、木魚を売っていた方は東京の仏壇職人の方と判明。そこでその方に電話をしたのだが、なんとその木魚はその方の作ではなく、仏具店に依頼されて売っていた物だったのである。しかし、その方は親切にも名古屋の仏具店を教えて下さった。その仏具店に連絡をとり、木魚職人の方とコンタクトがとれたのは、なんと2000年8月31日の午後10時のことだった。(木魚の製作現場は企業秘密ということで見ることはできなかった。)

◎ 木魚職人(井上豊さん 銘:玉豊 50代)へのインタビュー

Q1. 木魚を作る手順と使う道具は?

A 1. 丸太を切る→外側のだいたいの形をとる→中を削り抜く→外の飾りを完成させる。使う道具はのみだけである。(種類は数種類ある)

Q 2. 使っている材料は?

A 2. 昔は楠を使っていたが、今は桑を使って仕事をしている。

Q 3. どのくらいの大きさの物をどれだけの時間をかけて作るのか。

A 3. 3寸5分(約10cm)ぐらいの物なら2日、3尺(約90cm)ぐらいの物なら3年~5年ぐらいかかる。この期間の差は、木魚を乾燥させる時間の差である。

Q 4. 一番難しいところは?

A 4. 木から丸い木魚の形に削り出すところ。

Q 5. 特殊な木魚を彫った事があるか。

A 5. 特殊な木魚の製作を専門にしているので、シャチ彫りなどを行っている。

Q 6. 悩みなどはないか。

A 6. 後継者不足が悩みである。今では全国で10人ぐらいしか職人がいない。

以上がインタビューの概容である。

IV 結 論

木魚には輝かしい未来はない。しかし木魚を使う宗派がなくならないかぎり、木魚は仏具として存在し続けるだろう。余談だが、インターネットで木魚について検索している時、「デジタル複音階木魚“ピチモク”という物を発見した。「楽器としての木魚は、デジタル化などをして、長いこと生き続けるのではないか」とふと思った。

V 参考文献及び協力者の皆様(順不同)

- ・無著道忠著(1909)「禅林象器箋」京都貝葉書院
- ・清水乞編集(1978)「仏具辞典」東京堂出版
- ・大場磐雄監修(1971)「新版考古学講座第8巻 特論(上)」雄山閣出版
- ・ひろさちや監修(1999)「仏教早わかり辞典」主婦の友社
- ・寺院のパンフレット、寺院・仏具店・仏具業者へのアンケートの回答

◎御協力頂いた方々(人名、寺院名、社名など)

〔名古屋〕井上豊さん(木魚職人)、春日井仏具、名古屋仏壇共同組合

〔京都〕知恩院、辻井岩次郎商店、南禅寺、萬福寺、谷口法衣仏具店、建仁寺、東福寺、相国寺、仏光堂

〔大阪市〕大覚寺、超心寺、春陽軒、懶銭辰堂社長 植本昭彦さん

〔高石市〕大門仏壇堂

〔堺市〕浜屋、シメノ

〔東京〕遠藤仏壇店

〔福井〕永平寺

〔滋賀〕延暦寺

皆様、御協力有難うございました。